風恋花

佐木隆三

恋花

佐木隆三

潮出版社

風恋花

定価　一二〇〇円

昭和五十五年十一月二十五日　印刷
昭和五十五年十二月　十　日　発行

著　者　佐　木　隆　三
発行者　富　岡　勇　吉
発行所　株式会社　潮　出　版　社

東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替　東京　五―六一〇九〇
郵便番号　一〇二

本文印刷　第一印刷株式会社
付物印刷　栗田印刷株式会社
製　本　株式会社鈴木製本所

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。)

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。
© R. Saki 1980 Printed in Japan

風恋花（ふうれんか）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

栃沼の、オッネ婆さんの家に、若い女が間借りしたのは、九月末だった。わずか三反ほどの畑地ながら、ひとり暮しとあって、楽に生活している婆さんは、たしか七十を過ぎている。身寄りはないとの話しだったが、遠くにいた孫娘でもやって来たのかと、なにかのついでに近所の者が尋ねてみたら、赤の他人とのことだった。

もともと、オッネ婆さんは、口数が少ない。行き会えば会釈はするし、声をかければ答える。だが彼女から話しかけてくることは、まずないのである。とくに人嫌いではなさそうだが、このへんでは変り者とされている。

栃沼一帯は、開拓地である。オッネ婆さんは、満州からの引揚者で、夫婦二人でここへ来た。なかなかの働き者同士だったが、三年目に夫が倒れた。開墾疲れなのだろう、これといった病名もないまま、半月足らずで死んだ。それいらい、ずっと一人暮しなのだ。

そのオッネ婆さんの家の、納屋の二階に、若い女が住みついた。かれこれ二ヵ月になるが、あまり見かけた者は居ない。小さな納屋だから、二階はせいぜい四畳半ほどのスペースで、ほとんど外出もせず、閉じこもっているらしい。素性のほどは、まったく知れないが、二十二、三歳ですらりと背が高く、色白である……。

「それでベッピンか？」

圭介が、聞いた。いつもの、三等郵便局の隣りの、〈にぼし〉である。

「分らん」
「無責任だな、おまえ！」
ビールのコップを、音をたててテーブルに置き、圭介は大声を出した。むろん冗談だから、話し手の信行は動じる色もない。ニヤニヤ笑って、揚ドウフをつついている。
「かんじんのことを確めないで、よく情報屋がつとまるもんだな」
「さすがの情報屋も、ちょっと」
かつて信行は、情報屋と呼ばれようものなら、相手かまわず飛びかかった。小柄な体は逆襲されると、たちまち地べたに叩きつけられたものだが、いまでは自らをそう呼ぶ。
「なにしろ、髪が長い」
「ほう？」
「こんなに垂らしている」
ハシを持った手で、メガネをずり上げながら、信行は体をよじって、背中のあたりを目で示した。
「みごとな黒髪なんだよ」
「コンブをよく食ったべ」
「そうかもしれんな」
「そうだとも。……親爺さん、コンブくれや」
ここは季節を問わず、オデンのある店なのである。東京から来たという六十くらいの親爺は、空地に屋台を出していたのだが、いつの間にかバラック小屋になって、手ごろな一杯飲み屋なのだ。
店の名前さえないが、圭介たちは〈にぼし〉と呼んでいる。つきだしが、煮干だからである。オ

デンの店で、なぜ煮干が出るのかは分らない。ビールにしろ日本酒にしろ、注文するとすぐ、小皿に山盛りの煮干が出るから、カネがないときは、オデンを取らなくて済む。
「だが待てよ。みごとな黒髪はいいが、なんで顔が分らんのだ？」
コンブを入れてもらうために、圭介が皿を出しながら言うと、めったに口出ししない親爺が、
「それは後ろ姿しか見てないからだよ」
と説明した。
「あっはっは、そういうことだね」
思わず笑って、圭介としては、それきりにしてもよかったのだ。彼はとりたてて、オッネ婆さんの家の間借人に、興味をもったわけではない。十数年来の空港反対闘争で、ずいぶんな数の人間が、北総台地へやって来た。開港してしまってから、様相は異なってきたが、それでも支援グループは常駐している。若い女もだいぶ居て、一人で歩いているのを見かけると、つい声をかけたくなったりする。しかし手きびしい反撃を受けるのは、目に見えているのである。
だが信行は、気になることを言った。
「ちがうよ、そうじゃない。おれがバイクで栃沼を走っていたら、オッネ婆さんとこを出た女が、こっちへ歩いて来た」
「じゃあ、前から見た？」
「スピードを落して、近くから観察するつもりでいたら、逃げられた」
「ははあ。すると敵が、くるりと後ろを向いて引き返したわけ」
「そうじゃない。スタスタ歩いてさ……」

つまり彼女は、そのまま歩き続けたのだが、心もちうつむき加減に、長い髪を前に垂らして、顔を隠したというのである。
「夕方だったから、よく見えなかったせいもある」
「要するに、信行が近づいて来たので、顔を隠した？」
「そういうこと」
「ふーん」
オッネ婆さんは、最初から、空港反対同盟に加わっていない。買収予定地域に入っていないから、反対する必要がないと、はっきりしたものだった。その点は、圭介も感心する。なまじ反対派になり、青年行動隊員として勇ましいことを言ったばかりに、脱落してからというもの、後ろ暗い思いでいなければならない。
とまれ納屋の二階を借りた女が、反対派でないことだけは、まちがいなさそうだった。
「なんで顔を隠したのかな」
「それなんだよ」
「信行のこと知っているのかもしれん」
「いや……」
メガネの奥で、細い目をしょぼしょぼさせて、照れたような表情だった。圭介と同じ二十六歳だが、少年の頃から〝歩きの信ちゃん〟と異名をとるくらい、あっちこっち出かけて、大人の世間話なんかも仕込んできたものだ。
「どうせ他所者にきまっている。おれのことなんか、知るわけねえだろ」

「だからおまえが、蒲田のアパートに居たときの、知り合いとかさ」
「そりゃないよ」
信行が苦笑した。二年前まで、東京で働いていた。大田区のプラスチック工場に勤めて、蒲田駅から歩いて十分くらいの、川っぷちのアパートを借りていたのである。圭介は何度か遊びに行き、いつかは一週間以上も、四畳半一間の部屋でゴロゴロした。そのときの印象では、とても女に縁のある生活ではなかった。
「するとなんだろう?」
「うーん」
しばらく二人で、考えこんだ。午後十時すぎ、〈にぼし〉にほかの客は居らず、だいたいこんなものである。
「よほどのブスなのかしらん」
「ブスはみんな、顔を隠すか?」
「そうだよな。いっそ隠してくれればいいんだが、ブスにかぎって、こんなふうに顔を上げてギラギラ目を光らせている」
「へへへへ、圭介みたいに」
「この野郎ふざけるな。成田のアラン・ドロンが、そんなみっともない真似するかよ」
アラン・ドロンはともかく、圭介は容貌には、まあ自信がある。それは周辺の者も、ある程度は認めてくれるが、「いったん口をひらけばもう終り」と注釈つきなのは、度のすぎたおしゃべりぶりをさしているのだ。

だが、気にすることはない。いっしょに居るあいだ退屈しなくて済むと、つき合ってくれる女が常時三人は居て、セックスのほうも不自由していないのである。圭介が乗っているライトバンを見かけると、「寝台車だっぺ」と指をさすとの噂を聞いたときも、悪い気はしなかった。カーセックスはお手のもので要するにプレイボーイと見られているのだから……。

「すると意外に、ベッピンなのかな」

「なんで?」

「ヘタに顔をみせると、このへんの男どもがうるさい」

「だから顔を隠す」

「きっとそうだよ、大原麗子か中野良子クラスのベッピンにちがいない」

「圭介はほかに女優を知らんのか」

「あっはっは」

「山口百恵を認めろ」

「これだから、信行はいつまでも、お子様ランチなんだよ」

「なにを言うか、あの妖(あや)しい魅力が分るのが、大人ってものだ。おまえなんかヒヨコだから、姉さまタイプを求める」

「偉そうに……」

「ああ、百恵ちゃーん!」

信行が叫んで、大笑いになって、ビールをもう一本追加しようとしたとき、

「冷えるね」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

二人連れが入って来た。
年かさのほうが革ジャンパーで、若いほうはウインドヤッケを着込んでいる。大はしゃぎの客を、ちらっと見る目つきは、とくにきびしいものではないが、ビールを追加するどころではなかった。
「帰るべ……」
どちらからともなく言って、合せて千二百円の勘定を大急ぎで払い、圭介と信行は表へ出た。
「どこの刑事だ?」
「見たことないなア」
「応援かな」
「そんなものだっぺ」
言い交しながら、二人は神社のほうへ急いだ。〈にぼし〉で飲むときは、圭介のライトバンも、信行のバイクも、境内の脇へ停めておくのである。
「じゃあな」
「うん」
二人はそそくさと、声をかけ合って別れた。

オッネ婆さんとこの間借人は、あいかわらず、顔を見せない。ずっと納屋の二階にこもりっきりというのではなく、母屋と往ったり来たりしているらしい。彼女は自炊しておらず、オッネ婆さんが食事時間になると、呼んでいるようだ。間借人というよりは、三食付きの下宿人なのか。
いつもジーンズのズボンの女は、けっこうオッネ婆さんの手伝いもする。畑に出かけている姿は、

まだ見かけないが、豚舎のある庭を、餌くれなどで動き回っている。堆肥(たいひ)づくりのために、スコップやフォークを使ったりもする。

オッネ婆さんは、有機農業をずっと実践してきた。たいした頭数ではないが、養豚は二十年来なのだ。若い女がなぜ、豚舎のある家に、わざわざ間借りしたのかも、分らないところだ。臭いは納屋の二階へも流れるだろうし、蝿はわがもの顔に飛び交っている。補償金で家を新築し、空部屋をもて余している幸市爺さんの例だってある。息子夫婦は木更津のほうへ逃げて、淋しがっていることだし、間借人が現れれば、一も二もなく承知するであろう。

にもかかわらず、髪の長い女は、栃沼でもポツンと孤立した感じの、小さなオッネ婆さんの家に入りこんだ。縁続きでもなんでもないのに、どういうことなのか。そのへんが、分らない。ただの気まぐれにしては、もう一ヵ月半になるのである。

だからといって彼女は、オッネ婆さんのところに、こもりっきりではないのだ。散歩というか、夕方になると、県道を東のほうへ行く。つまり人家のないほうへ向うのだが、背筋をしゃんと伸ばしてスタスタと、足早なのである。そして人に出会えば、例によって長い髪を前へ垂らす——。

「どこへ行くんだろう?」

「それが分らない」

「寒くないのかな」

「黒っぽいセーター一つだべ」

「へえ……」

またしても〈にぼし〉で飲んでいるのである。一週間前とはちがい、きょうは時間が早くて、ま

だ暮れきってはいない。
「分ったぞ」
「なにが？」
「その女のこと」
口の中でくちゃくちゃやっていたスジ肉を咽(の)みこんで、圭介はニヤリと笑った。駄ジャレを、思いついたのだ。
「きっと不感症だっぺ」
「えっ？」
「セーター一つで寒くないのなら、不寒症に決っている」
「……」
「あっはっは、不感症じゃ、仕様がねえ」
どうも信行は、にぶくて困る。親爺の反応をうかがったが、例によってむすっとした表情で、オデン鍋のダシ加減を見ているのである。
「いけねえ、五時半の約束だ」
信行が、あわてた。市内で、高校の同窓会の、打ち合せだとか。
「おまえ、どうする？」
「帰るべ」
それで勘定が、六百二十円。原則としてワリカンだから、それぞれポケットの硬貨を取り出して払った。

「しかし、気になるなア」
表へ出たところで、圭介が言った。オッネ婆さんとこの、間借人の件である。
「隠せば、見たくなるのが、人情だっぺ」
「へへへへ、悪い癖がはじまったな」
「情報屋が頼りないから、いっちょおれが、当ってみるか」
「そうだな。圭介に任せるべ」
どうやら信行は、同窓会の打ち合せで、気もそぞろのようだ。圭介とは、中学は同じだが、高校がちがう。商業へ行った信行のほうは、やたら女の同級生が多いのを、得意がっていた。正月の同窓会には、参加者が多いというけれども、同期の連中はだいぶ結婚して、このところ焦り気味の信行が、嫁さん候補に巡り合えるかどうか……。
「じゃあ、また、電話するべ」
「分った」
バイクの信行を見送る恰好で、しばらく境内の前に、突っ立っていた。同窓会なんて、つまらないような気もするが、うらやましくもある。圭介は農業高校へ進んだものの、三年の夏に、中退してしまったのだ。
「まあ、いいや」
ひとりごちながら、車に乗った。父親が出資者の一人である、空港ビジネスセンターの、営業マンということになっているが、要するに使い走りなのだ。きょうだって、午後からサボッてしまい、いつの間にか〈にぼし〉である。

スタートさせたものの、行くあてはない。信行には、家へ帰るといったが、こんな時刻はテレビもおもしろくないし、親からくどくど文句を言われるだけだろう。

圭介はつい、栃沼のほうへ、車を向けていた。ほぼ暗くなってきて、飛行機の離着陸が、ふえはじめる。乗ったことがないから、分らないけれども、アメリカ行きにしろ、ヨーロッパ行きにしろ、夜発って朝着く便に、客が集中するせいらしい。

二、三分も走れば、空港の金網である。防護柵は、たいてい二重になっており、警備隊の宿舎のあたりは、さらにジュラルミンの壁なのだ。サーチライトが光って、見張台には、双眼鏡の機動隊員が立っている。ゲートの外側には楯を持ったのが、二人か三人居る。たぶん年齢的には、圭介と同じか、ちょっと下であろう。夏も冬も、あの服装は、外見的には同じである。あれでよくやっていられるものだと、ふしぎでしょうがない。

ちらっちらっと空港を見ながら、圭介は制限の四十キロで走った。栃沼は三分の二が予定地域にされて、早い連中はもう十年も前に買収に応じ、北総台地から去っている。地名の由来の、沼そのものは、もう無い。滑走路になってしまったのだ。オツネ婆さんのとこは、東のはずれで、ひっかからなかった。

信行ほどには、このへんの地理に通じていない。それでも、オツネ婆さんの家なら知っている。圭介は、大きな欅を通りすぎたあたりから、徐行して様子をうかがった。県道から、五十メートルほど、引っこんでいる。

「あれか……」

十坪もないと思われる、平屋なのである。屋根はトタンで、いかにもみすぼらしい。むしろ納屋

のほうが、立派に見える。しかし、こちらには、灯が点いていない。母屋で夕食をとっているのか。それとも、例の散歩なのか。

まさか用もないのに、ノコノコ小路を入って行くわけにはいかない。圭介は車を停めずに、そのまま進んだ。情報収集というのは、けっこうむつかしい。信行はやはり、才能があるのだろう。

ふたたびスピードを上げて、圭介はそのまま、東へ走った。一キロほど先の十字路を右折すれば、市内へ出る。喫茶店〈エコー〉の多津子は、八時までの勤務だ。適当に時間をつぶして、「迎えに来た」と顔を出せば、喜んでくれるにちがいない。

ところが十字路のちょっと手前で、歩いている女を見つけたのだ。黒いセーターに、長い黒髪、それに濃い茶色のジーンズ。たちまち追い越したが、三十メートルほど過ぎたところで、圭介は停めた。

「当って砕けろだ」

待っていると、女はなにごともなさそうに、歩いて来る。一メートル六十センチはあり、細い体つきだった。背筋をしゃんと伸ばして、スタスタと……なるほど髪は、いつのまにか前に垂らしている。

「ちょっと！」

左側のドアを開けて、圭介は、声をかけた。いつも自分で、ほかに適当な言葉がないものかと思うが、いざとなると「ちょっと」なのである。

「……」

女は立ち止った。すだれのように、髪を垂らしたままだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com